

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 9 日現在

機関番号：33601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20530379
研究課題名（和文）技術系ベンチャー企業における戦略転換と組織学習に関する実証的研究
研究課題名（英文） Empirical study of strategically turnaround and organizational study in technology based Venture business.
研究代表者
河野 良治 （Ryoji KONO）
長野大学・企業情報学部・准教授
研究者番号： 30350424

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学

キーワード：ベンチャー企業、起業家、イノベーション、経営戦略、コンピテンシー、組織学習

1. 研究計画の概要

本研究の目標は、イノベーションの担い手として注目されるベンチャー企業が成長するために有効な戦略転換のパターンとそのための組織学習を明らかにすることである。そのためには、ベンチャー企業の競争優位性の源泉を無視できないであろう。そのため、アンケート調査からの実態把握を目指す。

- (1) こうした調査を実施するために、公共性を併せ持つと考えられる大学発ベンチャー企業にもインタビュー調査を実施した。
- (2) 戦略の策定と実施といったサイクルによって引き起こされる組織学習の成果である。調査サンプルの中で、特徴的な戦略転換のパターンや組織学習を明らかにする。
- (3) こうした研究成果を、整理し、学会発表や論文としてまとめる。

2. 研究の進捗状況

(1)まず、より良い質問票作成のため、東北大学の堀切川教授、広島大学や早稲田大学の協力を得て、大学発ベンチャー企業を含めたベンチャー企業へのインタビュー調査を実施した。結論として、ベンチャー企業へのインタビュー調査は、非常に実り多いものとなった。まず、ベンチャー企業における起業家の重要性を痛感した。経営学が想定した組織学習概念は、大企業においてそこに参加する人々が共通の経験によって、特定の価値観・行動パターン等に影響を与えられると考えられる。しかし、多くのベンチャー企業では、企業規模が大きくても十分な権限委譲が行われているケースが少なく、起業家の役割が非常に大きい様子が観察された。そのため、戦略策定や組織学習の担い手は、起業家個人である事例が少なくない。こうした知見から、より

起業家個人に焦点を当てた研究戦略を採ることにした。

(2)ベンチャー企業へのインタビュー調査を基にして、質問票を作成し 2000 年以降新興市場に上場した企業、アントレプレナーオブザイヤーと中小企業創業国民フォーラムに 2000 年以降ミネートされた企業(900 社ほど)を対象に 2009 年と 2010 年にアンケート調査を行った。2009 年調査は、知的財産権や技術的な質問の多さから、現状を把握するためには貴重なデータ得られたが、分析には十分な回答数を得られなかった。2010 年調査では、さらに質問票を精査し、一定数の回答を得ることができた。

(3)2008 年のインタビュー調査から、産学連携が行われる基盤としてのクラスターについての考察が深まり、経営学会全国大会での発表をより豊なものにしてくれた。また、起業家をキャリア形成の視点から捉えることの重要性を認識し、理論的研究を進め、自身の経験を整理し共著論文を作成した。

2011 年度は、これまでの調査結果を分析し、その成果を学会発表するべく申請している。また、研究成果について日本ベンチャー学会誌への投稿を目指して論文を執筆している。

3. 現在までの達成度

(1)当初の計画以上に進展している。

(理由)

理由は 2 点ある。第一の理由は、ベンチャー企業に対するインタビュー調査の中で、ベンチャー企業の経営において起業家の役割が決定的に重要であることがアンケート調査を実施する前に分かった点である。また、起業家の能力・資質を分析する視点として、

彼らのキャリアによる影響が大きく、コンピテンシーという分析視角を得ることができた。第二の理由は、調査としての副産物として、日本でも継続的にイノベーションを引き起こすと期待された大学発ベンチャー企業十分には機能していないことが明らかになってきた。この課題について実態的な問題把握をする機会を得て、日本経営学会全国大会で発表を行うことができた。

(2) おおむね順調に進展している。

(理由)

2009年調査は知的財産権や技術的な側面の質問が多く、統計的な分析には耐えられない数の回答であった。しかし、その回答をつぶさに読むと、特に起業家のキャリアについて非常に興味深い発見が2点あった。具体的には、起業家の高学歴化と起業家は高い確率で成功体験を繰り返し経験している点である。2010年調査では、質問票を精査し、ある程度回答を得ることができた。2009年調査の結果をより多くの回答数から再確認することができ、調査の信頼性を高めることができている。

(3) おおむね順調に進展している。

(理由)

2011年度の目標は、これまでの研究を総括し、学会発表や論文としてまとめることである。すでに学会発表の申請を済ませており、おおむね順調であると判断できる。5月以降は、これまでの調査をまとめて論文執筆をする予定である。

4. 今後の研究の推進方策

起業家教育をより有効なものとしていくために、起業家の資質・能力を把握する枠組みを構築するべきでは無いかと考えている。その一つのアプローチとして、コンピテンシーに注目している。コンピテンシーの中でも、成功のリスクが高い課題にも果敢に挑戦し、失敗から学ぶことができるという特徴を持ち、起業家に限らず、高い業績を上げる人材に共通していると指摘される自己確信に注目して研究を進める。こうした研究は、リスクの高くても努力が求められる現代の中核的な従業員に不可欠な要素であり、社会的な貢献も大きいと考えられる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 河野良治・岩田一哲 「起業家教育についての一考察-中核人材へのコンピテンシー論アプローチ-」、『高松大学紀要』、

- 第32号、pp37-64、2009年、査読なし
- ② 河野良治 「ベンチャー企業と起業家の現状について」、『弘前大学経済学会会報』、第51号、pp94-96、2009年、査読あり

[学会発表] (計4件)

- ① 河野良治 「日本における省エネ技術の開発-あるベンチャー企業における調湿機開発の事例-」、中小企業に関する国際シンポジウム、Oct. 29, 2010、大学(中国五邑)
- ② 河野良治 「ベンチャー企業と起業家の現状について」、第34回弘前大学経済学会、2009年10月24日、弘前大学人文学部メディアホール
- ③ 河野良治 「The Present Condition of Venture Business Founder in Japan」、International Forum on SMEs' Development2009、Oct. 16, 2009、Beijing Conference Center
- ④ 河野良治 「イノベーションが継続的に生まれるクラスターを形成するための理論的検討」、日本経営学会 第82回全国大会(一橋大学)2008年9月4日

[図書] (計1件)

- ① 河野良治 「イノベーションが継続的に生まれるクラスターを形成するための理論的検討」、『日本企業のイノベーション』、千倉書房、pp156-157、2009年